園長通信～こころ～ №１０９

源氏物語

2024.9.17

日曜日の夜の８時といえば、何をしているか。子どもの頃は、親と一緒に、ＮＨＫの大河ドラマを見ていた。おかげで、もともとの歴史好きが、さらに好きになっていった。その後、大河ドラマは必ず見るという位置づけではなくなった。人々の生活も多様化している。私の生活もそうである。

昔、『源氏物語』を読んだことがある。記憶が定かではないが、高校生だったと思う。中学のときに読むわけがないし、大学では、読書らしい読書をしていない。読んだのは確かだが、原文ではない。訳本である。源氏物語の訳本はいくつもある。瀬戸内寂聴、与謝野晶子、谷崎潤一郎などである。最近では、角田光代さんだろうか。私が読んだのは、田辺聖子訳だった。ハードカバーの立派な本だった。あの頃の私が、ハードカバーの本を買うのは珍しい。読んでいたのは、文庫本ばかりだった。古典の名作には、しっかりと対峙しなければならないとでも思ったのだろうか。

本のタイトルは、『新源氏物語』だった。源氏物語の訳本は、訳者によって、与謝野源氏、谷崎源氏、瀬戸内源氏などと呼ばれる。私が読んだのは、田辺源氏である。源氏物語は、話が長い。だが、一気に読んでしまった記憶がある。それだけおもしろかった。きっと、田辺聖子さんの訳が、作品の世界に、あの当時の時代へと私を誘ってくれたのである。

最初は、こんなに分厚くて長い物語を最後まで読めるのかという不安があった。なぜ、源氏物語を読もうとしたのかは思い出せない。古典の代表作の一つだから、読まなければならないという義務感のようなものがあったのかもしれない。『徒然草』や『枕草子』は、参考書としてもっていた。この２つは、読み物ではなく、勉強の対象という位置づけだった。

現在、日曜日の大河ドラマで、「光る君へ」が放送されている。何となく見ている。ただし、夜の８時からではない。録画したものである。録画しておくと、一気に２話分、３話分と見られるから便利である。源氏物語の作者である紫式部が出てくる。あの時代に、後世に残る文学的評価が高い物語を書き残した女性である。少なからず興味がある。

源氏物語には、読者を引き込むおもしろさがある。どんどん先を読みたくなる。これが、物語の世界なのだろう。もちろん、原文ではこうはいかない。訳本だからこそのことである。それも、田辺源氏だからなのではなかろうか。与謝野源氏や谷崎源氏も少し読んでみたが、田辺源氏とは違っていた。私には、田辺源氏が合う。そのうち、角田光代さんの源氏物語を読んでみようかと思う。きっと１０代で読んだ田辺源氏とはだいぶ違う印象になるだろう。源氏物語、日本が誇る不朽の名作である。